

# 蘭 嶼 島 誌

—— 海洋民ヤミ族の共生社会 ——

東 喜 望<sup>\*1</sup>

## はじめに

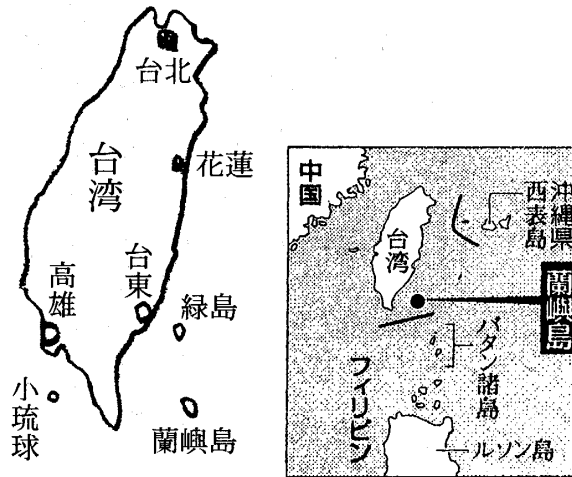
文部科学省の補助を受け、平成十三年度から平成十五年度に至る三年間実施された共同調査<sup>①</sup>に私は参加した。私たちは、この間、台湾とその離島（琉球嶼・緑島・蘭嶼島）、韓国と済州島（旧・耽羅）、インドネシアの島嶼群（スラウエシ・ジャワ・バリ・ロンボク・スンバワ）など、琉球列島の周辺及びその南方に位置する島々を調査し、多くの成果をあげることができた。その調査成果は、本紀要をはじめ、二、三の学術誌に発表<sup>②</sup>してきたが、それらはこの調査成果のほんの一部分にすぎない。

ここでは、近年学界でも重視されている台湾の離島、蘭嶼島（旧・紅頭嶼）について報告しておきたい。

実際に見聞したことを忠実に記述することを旨とし、既に公表されている諸研究者の論考も積極的にとりあげながら、病んだ（文明社会）とは違って、今もなお平和で平等な社会を維持

している島民（ヤミ族）の生活の実状や社会のしくみについて考察しておきたい。

この論稿の投稿を許された、本紀要担当の委員各位に厚く御礼申し上げたい。



(朝日新聞より転載)

バタン島

図1

## 一 蘭嶼島の地理と沿革

台湾（中華民国）南端の台湾海峡側に琉球嶼（旧・小琉球）があり、太平洋側に緑島と蘭嶼島がある。琉球嶼は観光地で、緑島は刑務所主体の島であるが、蘭嶼島（図1）は後述のように、

人類学上も重要な島とされている。

面積は日本の小豆島の三分の一ほどの小島であるが、六つのムラが存在する。即ち島の西岸に「紅頭 (Imorod)」・「漁人 (Iratay)」・「椰油 (Yayu)」があり、北岸に「朗島 (Iralalay)」・東岸に「東清 (Iranomilk)」・「野銀 (Ivalino)」がある。合計六村であるが、東岸に「介寿」という新村があり東南方に無人島小蘭嶼がある。島の行政上の地名は中華民國台東県蘭嶼郷。

南方俗民物質文化資料館の徐瀛洲氏は、その著『文化資産叢書「民俗類」蘭嶼之美』<sup>3)</sup>に、同島の地理について次のように記している。

蘭嶼是一個純樸美麗的小島、位於台灣本島東南方的西太平洋上、東經一二一度三〇分〇八秒——一二一度三六分二二秒、北緯二二度〇〇分〇六秒——二二度〇五分〇七秒。距西方鵝鑾鼻約七十公里、北方綠島六十餘公里、南方菲律賓巴丹群島約一百一十公里。蘭嶼的東南方五公里還有一個無人居住的小蘭嶼。

蘭嶼是古老的火山小島、地質則以安山集塊岩為主、形成於中新世中期到上新世。四周海岸為隆起的珊瑚礁所包圍。全島面積四十五點七平方公里、峰巒聳峙、呈現群礁的地形景觀。九座山脈大多呈不整齊的放射狀排列、以紅頭山為最高峰、海拔五百四十八公尺。

山稜多呈緩起伏面。但山坡、河谷則非常陡峭、尤其山地

周圍之隆起海崖非常陡峭、有時高達兩百公尺。河流因地形關係、亦為放射狀水系、落差頗大、相當短促。水量則因雨量而有顯著的變化。(略)

以下に、年間平均気温が摂氏二二・四度であること、毎年九月から翌年の四月にかけて東北の季節風が吹き、五月から八月にかけて西南の季節風が吹くことなどが記されている。

ちなみに、上記の「公里」はキロメートル、「公尺」はメートルである。島の周囲三八キロメートル。面積四五・五平方キロメートル。近刊の『台湾全図』<sup>4)</sup>によれば、紅頭山の高さは五五二メートル。同島を實際に訪ねてみる(二〇〇二年三月二六日〜二八日)と、日本のトカラ列島などと似ていて、黒い溶岩が海へ流れ込んでいるところが多く一見してこの島が古くは火山島であったことがわかる。新世代に形成されたというこの島の周辺を、珊瑚礁がとり囲んでいるから、魚介類は豊富にとれたはずである。今も沿海漁をはじめ、二月から六月にかけてトビ魚漁を行い、水量豊かな地域では水田耕作を行っている。ただし、栽培しているのは、タロイモである(写真・1)。

徐瀛洲氏はまた、同島の名称や歴史について、前掲著に次のように記している。

蘭嶼又有Botol Tobago、Botol Tobacco以及紅頭嶼之稱謂。

因位処台湾付近海域の一隅、所以早期與之相關的記載大多見於日人或荷人的海圖、以乃其他西方人士（如殖民將領或傳教士）的筆記中。

自十七世紀初起、關於蘭嶼的地名就有數種不同的称呼：根拠日本大阪末治勘四郎所藏的（慶長十二到十三年、一六〇七—一六〇八）古地圖、蘭嶼被標示為「タバコ」、即Tabako也。就是Tabacco（煙草）之意。另外、一六四四至四五年以古荷蘭文写成的《巴達維亞城日記》書中、記載其名為Boioi島嶼、而十七世紀以後的《清帝國圖》一書、蘭嶼被稱為Tabacco Xima。

この島を「タバコ・シマ」と呼ぶようになったことについては、金関丈夫博士もふれておられ、博士は慶長九年（一六〇四）から元和三年（一六一七）の間に使用された『末吉船航海図』に「たばこ」の名を付して以来、日本の航海者がこれを「タバコシマ」と呼んだのは明らかで、ニコラス・サンソン作（一六五二）の『支那帝国図』にも「タバコシマ」との記載があるという。<sup>3</sup>ちなみに、上記の「末吉船」とは、江戸時代初期、末吉孫左衛門が毎年朱印状を受けて、海外貿易に従事し、ルソンやトンキンへ渡った、いわゆる朱印船のことである。その時、使用した海図が「末吉船航海図」。

末吉孫左衛門（一五七〇—一六一七）は大坂平野の豪商。銀座頭役勘兵衛の子。大坂の陣で手柄を立て、河内二郡の代官となり、

朱印状を受けて海外貿易に従事した。

だが、末吉船が蘭嶼島（紅頭嶼）をなぜ「タバコシマ」と呼んだのか、その理由は明らかでない。同島はタバコを生産しないからである。

徐氏はまた前掲につづき、この島から中国の宋・明時代の瓷器が最近大量に発見され、この島が宋・明時代以前から中国と密接な関係にあったことを指摘し、「紅頭嶼」という島名は康熙六十一年（一七二二）刊の『台海使槎録』（黄叔瓚著）に記載があると記している。そしてさらに、「紅頭嶼」が中国（清国）の恆春県府の管轄下に置かれたのは、光緒三年（一八七七）で、島名が省政府によつて「蘭嶼」と改められたのは、民国三十五年十一月二十四日だと述べている。その地名の由来は美しい蝴蝶蘭の咲きほこる島という意味らしいが、その改名は日本の植民地から解放された一年後の一九四六年のことである。

『蘭嶼之美』（歴史）の項は、次の記事でとしている。

蘭嶼島上の住民為雅美族、雅美YAMI、這一名称係一八七七年日本学者鳥居龍藏第一次赴該島調査時、因島人自我称呼「YAMI KAMI」（不含有你們在內的我們之意）、故而將該島住民命名為YAMI族、自是沿用至今。

雅美族的語言與菲律賓賓伊巴丹語有密切的關係、屬於Austronesian語族、Hesperonesian語派。巴丹諸島在十七世紀後半、即有西班牙傳教士前往傳教、到了一七八三年為西班

牙派軍佔領。根拠多明尼哥 (Dominico) 教派伝教士的記録及雅美族耆老口伝、可以了解蘭嶼雅美族與巴丹諸島於十八世紀之時仍有往来。

上記の鳥居龍藏 (東京帝国大学理科大学標本整理係。当時二十五歳) が、紅頭嶼を調査したのは、一八九七年 (明治三〇) 十月二十五日から十二月二十九日までのおよそ二か月間であったという。

この時、鳥居が島民から聞き取り、彼らが自ら「YAMI」と名乗ったので、ヤミ族という名称をつけたという。その本来の意味は、「我」のことだというのが、一説では「北風の吹いてくる方向に住んでいる人たち」のことだともいう<sup>5)</sup>。当然、直接には東岸の東清村や野銀村の住民を指しているように思われる。後述のように、両村は、今になお最も古型を残しているムラである。

上掲にはまた、ヤミ族の言語がフィリッピンのバタン島の言語と密接な関係にあり、オーストロネシア語族のヘスペロネシア語に属すると記している。ちなみに、オーストロネシア語族とは、インドネシア語・メラネシア語・ミクロネシア語・オーストラリア語を含み、東南アジアからマダガスカルに及ぶ言語を使う民族をいうが、フィリッピンのルソン島からこの紅頭嶼に至る間の、バブヤン諸島とバタン諸島・紅頭嶼の島民は、明らかにオーストロネシア語族であり、特にバタン諸島と紅頭嶼の言語 (バタニック語) は、共通しているという。

ちなみに、オーストロネシア語族の諸集団は、紀元前より諸

方へ移動し、ヤミ族の先祖もバタン諸島から移住してきたと伝えられている (後述参照)。ただ、その正確な年代は不明であるが、およそ六百年前には、確実に定着していたと推定されている。

移住してきた人々は、当初、山麓の森林地帯に住み、主に焼畑農耕を営んでいたが、その後、扇状地に隣接する平坦地に集落をつくる。口碑によれば、それはおよそ四五〇年ほど前だという。

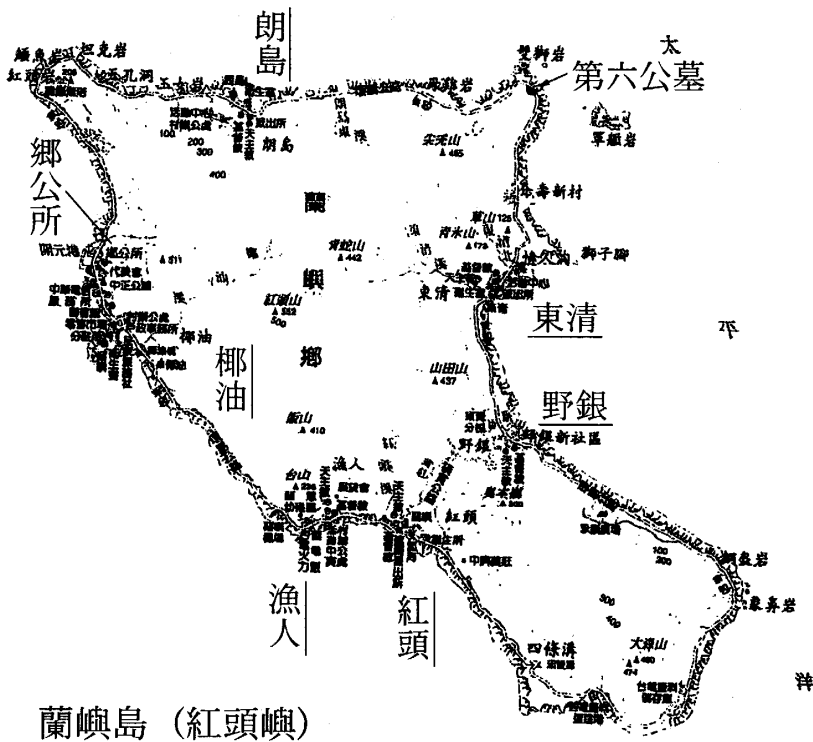
かくて溪谷より流水を引き水田を造成してタロイモを栽培し今日に至っている。

先祖の島、バタン諸島とは、長期にわたり贈与交易を行い、自島の豚と、金・銀・中国製陶器・鉄などと交換した。その際、使用した船は最大十六人乗りで、Avang (アヴァン) という。

この時の交易品の一部は、今も各家に残されているようであるが、前記のように、十七世紀後半からスペインの宣教師がバタン諸島に渡り、ついに一七八三年、スペイン軍は同島を占領し植民地化した。そのため、この渡洋交易もとだえ、十九世紀前半、台湾商人が来島して、豚と引き換えに鉄や銀などを供給したが、二十世紀初頭まで、ほとんど孤立状態に置かれたという<sup>7)</sup>。

## 二 家族形態と集落の景観

前述のように、蘭嶼島のヤミ族は、かつて台湾とルソン島をつなぐバシー海峡一帯を航海して交易を行った勇敢な海洋民だ



蘭嶼島 (紅頭嶼)

図2

つたのである。船をあやつり島外から富をもたらすのは男性であるから、父系親族集団が発達し、祖霊信仰が重んじられた。おそらく、ボルネオのメラナウ族やビダユ一族と同じように、当初は同じ氏族ごとに大家族で住んでいたと考えられる。

だが、スペイン侵攻後、渡洋交易が途絶えてからは、父系親族集団の機能も次第に弱体化し、やがてこの集団も分裂して小親族集団となり、核家族化した。信仰も祖霊よりも天上神(ᑭᑭ)を重んじるようになり、「個々の世帯と双方向的親族関係に基づく相互協力が社会を支える」ようになったという。つまり、親族を中心にした「ユイ」の社会を形成しているのである。

島の沿岸ぞいに幅二〜三間の道路が島を一周している。はたして、各集落を廻ってみると、その民家はほとんど小規模である。以下に各集落(図2参照)について実見したところを記し、殊にこの島特有の伝統的な家屋のある集落について詳述しておきたい。

島の南西岸の集落、〈紅頭村〉はホテルや郵便局、教会、売店などがあり、島の中心街である。その西側に位置する〈漁人村〉がこれに次ぎ、これら両村の家屋も今は洋館が多い。西岸中央部の〈椰油村〉の東部はタロイモの水田が広がっているが、こゝは、いわば島の官庁街で、郷公所をはじめ郷の代表会所や村弁公処、電信報務所、図書館、衛生室(診療所)、警察の分駐所などがある。ここにはまた船舶の港(開元港)があり、街の中央に市場もある。建物のほとんどはコンクリートの洋館である。われわれは、この郷公所で聞き取り調査を行い貴重な事実を採録したが、仔細は後述する。

北岸の〈朗島村〉は小さな漁村でいべきほどのものはない。

## 〔島の墓所〕

蘭嶼島の北東端に雙師岩がある。その南側の一周道路脇に墓所がある。「台東県蘭嶼郷第六公墓」という石標が立っている。この石標によれば、この墓所のほかにも同島には墓所があると考えられるが、未見のままである。

この墓所は、死者を埋葬した墓であるが、日本や中国などと違って、埋葬した死者を明示した墓標はない。つまり、原初の埋葬墓の形態を保持した墓といえる。

その葬法は、死者が出るとこの墓所に穴を掘り、埋葬してのち一本の木をその上に植える。そのため、墓所は森にかえるという（写真・2）。具体的な埋葬の仕方は後述を参考にされたいが、このような埋葬は、ベンガル湾上に浮かぶアンダマン諸島の漂海民（船を家として暮す人々）も同じ方法をとっている。このことから考えても、ヤミ族は、元、漂海民であった可能性もある。

ちなみに、蘭嶼島のこの墓は、ほとんどジャングルにかえっているが、この墓所の入り口には、現地で「鬼木」といわれる木が植えられている。同行した沖縄出身の教授によると、沖縄ではこの木を「クワディサー」といい、墓場にしか植えないという。この木にどのような世界の観念がこめられているのか、琉球列島との関連を把握するためにも今後に残された課題である。

## 〔東清村・野銀村と地下式住居〕

前述の第六公墓から島の東岸沿いに、約六キロメートル行つたところに東清の集落がある。西方の山地側に向けて、水田や畑地が開け、小さな湾港をなす海辺の砂浜には、カヌーが置かれていた（写真・3）。この種のカヌーは小さなもので、紅頭村の海岸にも数艘が放置されていた。その実長と装具は次のとおりである。

〈カヌー〉長さ約五・五メートル。中央部の幅約一メートル。オール二本。その長さ二・二メートル。乗員は二〜三名である。沿海漁に使つた漁舟と思われる。

野銀村は、東清村より、沿岸ぞいに約四キロメートル南へくだった集落であるが、東清・野銀ともに半農半漁の生活を営んでいることは明瞭である。

これら両集落で何よりも人目を惹くのは、住家で、家屋の半分乃至全部が地下にかくれていることである。東清村は水田や耕地がひらけ、その中に地下に半分身を隠した家屋が点在し（写真・4）、東清・野銀両村でも、海辺に近い家屋は、ほとんど地下にかくれ、屋根だけを見せている（写真・5）。ただし、野銀にも半地下の家がある。

両村ともに、家屋は東に向いて建てられているが、このように地下を掘つて家を建てていることは、明らかに風の抵抗を弱めるためである。以下に東清村の地下式住居の一軒をモデルとしてその構造の概要を記しておきたい。

## 〈東清村地下式住居〉

地上から約三メートル掘り下げた方形の屋敷に家屋が建てられている。屋敷は、横約八間、縦約六間。その四周は石が積まれ厚い石垣を成している。その中に家屋がある。横約四間、縦約二間半。幅約半間の廊下が横に走り、これに四つの部屋（幅約一間）がついている。柱は八本。建材はすべて木材。今は屋根にコールタールを塗ったキャンバスを張っているが、往年は草葺きであった。

屋敷の外の北側には、ネズミ返しの梯子のついた高床式の涼み台（写真・6）があり、北側には霊石が立っている。野銀村には、このような母屋のほか副屋（タガカル）のある家もある。いうまでもなく、これらの家一軒に一家族が住んでいる。島民の生活は質素で、昼間は耕地や海で働き、食事と寝る時に、この地下式住居（パイ）を使用し、仕事のない休日は涼み台で休んでいるようである。

## 三 霊石の問題と黒潮文化圏

前述のように、東清村や野銀村の地下式家屋の前には、高さ一メートル足らずの石が二基乃至三基立っている（写真・7）。いったいこの石は何のために建てられたのだろうか。

屏東県三地門に三地門原住民文化園がある。ここにヤミ族の地下式家屋が移築され、ヤミ族のカヌーや前掲の石も展示され

ている（二〇〇二年三月二十四日訪）。同文化園によると、この石（三基）の名称は「コウハイセキ靠背石」で、必ず海に面して立てられているという。家族が漁に出た時、家に残された家族はこの石を背にして待つことからこの名がつけられたという。野銀村では、二基の石を「夫婦石」と呼び夫婦のどちらかが死ぬとその内の一基を倒すという説明を受けた。

だが、いずれも正確ではないように思われる。なぜなら、バリ島の先住民バリ・アガの村トウンガナン（Tenganan）にも同じ石（三基）があるが、決して椅子として使われてはいないからである。同類の石は沖繩諸島やトカラ列島、八丈島にもあり、いわゆる黒潮文化圏に広く分布している。何らかの宗教的意味をこめて建てられた霊石であることはまちがいない。

二〇〇二年、来日されたノルウェーのオスロ大学教授レックム・アルネ氏（社会人類学）が同年六月、法政大学で講演され、往年、実地調査された蘭嶼島のこの霊石や八丈島の離島青が島に存在する同形の霊石についてふれられたことがある。

氏によれば、与那国島などでは石の中に神が宿っていると信じられており、特に太陽の神が宿る石は「ヒーダンガマチ」と呼ばれ大切にされる。蘭嶼島や青が島の霊石も同様の考えがあつて建てられたのではないか。ただ、南方の人が次第に北上して、この習俗を八丈島辺りまで伝播させたのではあるまい。島嶼に住む海の民には共通する観念があつてこのような共通する民俗文化を生んだと考えるべきではないかとレックム教授は語

られた。貴重な指摘であるが、例えば、沖縄の渡名喜島と八丈島の民家の庭に全く同じ三つ石や砲丸状の石が存在するのはなぜであろうか。なお、疑問は深まるばかりである。

#### 〔渡名喜島の住居と霊石〕

沖縄諸島のなかで、蘭嶼島の東清村や野銀村の住居と酷似している民家のある島は、渡名喜島である。民家のほとんどが道路より低く、その三分の一は地下に隠れているからである。

島は沖縄本島の西方にあり、久米島との中間に位置する。一島一村の島である。地割の遺構が残されていたことから、私たちは私学振興財団の補助を受け、昭和六十一年度より三年間この島を調査したが、島で最も目立つのはいわゆる「石敢当」である。小さな集落の丁字路の突き当りや四辻に必ず立っている。

詳細は拙稿「渡名喜島の民間伝承―口誦説話・霊石覚書」を参照していただきたいが、屋敷の外側にある石敢当とは違って、注目されるのは屋敷の内側に二基乃至三基の霊石を置いている家のあることである（写真・8）。この霊石がおそらく蘭嶼島の、いわゆる「靠背石」と同じ霊力を持つ石であろうと考えられる。

なお、同島の五軒の家でその存在を確認した砲丸状の自然石は、「チキシ」（写真・9）といわれ、いわゆる「力石」で、地中にひそむ病魔や悪霊を、この石を地面にたたきつけて追い祓つたという。二個で一对をなす。日本の本土には各地に存在し、八丈島に至っているが、蘭嶼島野銀村の地下式住居の東側に、

これに酷似する丸石が数基置かれていた。ただ、この石がどんな機能を果たすのか未調査のままである（写真・5参照）。

ちなみに、渡名喜島では季節風や台風が東岸から集落を通過して西岸へ激しく吹きぬけるので、道路より低い位置に家を建て、その周辺を厚い石垣と防風林の福木で囲むのだという（写真・10）。

#### 四 島民の生活と民俗

私たちは蘭嶼島へ渡る前日、高雄市政府原住民事務委員会主任委員林春治氏を高雄市役所に訪ね、聞き取り調査を行った（二〇〇二年三月二十五日）。通訳は同行した杏林大学講師・法学博士大坪力基氏が担当した。

台湾原住民について、林氏からおおよそ次のような教示を得た。

- (1) 当役所には、一組と二組の課があり、原住民の福利・厚生にあたっては、一組と二組の課がおり、担当分野は次のとおり。

一組Ⅱ文化・教育 二組Ⅱ経済・社会福祉

△原住民の経済的能力を育成することが、最重要課題となっている。

- (2) 原住民は現在十部族とされている。その人口は四〇万人。台湾人口の二パーセントにすぎない。（二〇〇五年版『世界の国一覽表』によると総人口は二二六〇万人）戸籍なき者が一万人もいる。アミ族は高雄市・台東市を含めて七六〇〇人。
- (3) 蘭嶼島の島民を「ヤミ族」とつけたのは、日本の鳥居龍蔵



で、「ヤミ」とは「我」のことだからこの名称は、正しいとはいえない。島民は自らの部族名を「Tao族」と呼んでいる。彼らの言語はバタン島に通じる。地下式の特異な家屋があるが、以前はほとんどこのような家に住んでいた。

本来宗教はアニミズムであるが、布教が進んで現在はキリスト教徒が多い。そのため伝統的な儀式は一時停滞したが、再び復活させる運動も起こっている。

ヤミ族は海洋民ですぐれた航海術と漁法を持っているが、現在使用しているカヌーの大きさから見ると、沖縄の糸満漁師のような遠洋航海ができたかどうか。余り遠くへは行かなかったのではないか。

余談だが、日本統治時代の一九四二年、高砂義勇隊が原住民によって組織されていた。これに関係した日本人がやってきて旧高砂義勇隊と先週盛大な交流会を開いた。(以下、省略)

以上のほか林氏から貴重な教示をいくつか受けたが、割愛する。かくて私たちは翌日、蘭嶼島へ渡ったが、ちょうど農業・漁業ともに休閑期で島民の労働の姿を直接見ることはできなかった。だが、幸い椰油村の蘭嶼郷公所を訪ね(二〇〇二年三月二十七日訪)、事務官周雅雯氏から現在のヤミ族の社会や生活、民俗や文化について詳細に教示を得ることができた。ちなみに、周氏は郷長の従妹(いとこ)にあたる。以下は周女史から聞いた事柄をまとめたものである。

なお、この時、立ち合った通訳も前記の大坪力基氏である。

#### 〔周雅雯氏談〕

- (1) 主産業―農業Ⅱタロイモ(水田耕作)・山芋。現在は里芋・サツマ芋も栽培している。漁業Ⅱ飛び魚漁(二月―六月)。親族集団ごとに六人―十人乗りの船で船団をつくり、夜、茅の松明を燃やして黒潮を回遊してくる飛び魚をすくい取る。  
〈分配法〉共同でとった魚は、平等に分ける。〈保存食〉天日で干して、干物にし、保存食にする(写真・11)。
- (2) 共同労働―「結い」の制度がある。これを〈Machi-ShinShin〉という。家屋の新築の時など、村中が手伝う。
- (3) 社会―人口三千人余。自給自足の社会。身分格差なし。現在は家族社会。核家族化が進んでいる。父系制社会だが、家族内の実権は、女性(主婦か)がにぎっている。  
〈相続・財産分配〉「家」は長男に相続され、長男が家系を継ぐ。長男は家屋と田をもらい、その弟にも田が分配される。女子は装飾品が分配される。分配は平等に行う。  
ちなみに、ヤミ族は金属の鍛錬技術にたけた、台湾唯一の部族で、金銀や銅で装飾品を作る。銀板で作った大きな甲かぶとや金製の胸飾りなどがあり、それを財産として各家で大事に保管しているという。  
〈婚姻〉特別のきまりはないが、夫または妻が配偶者を失い再婚する時は、子供の許可がある。

〔習慣〕漁が終了すると「御中元」にあたる贈答品をおくる習慣がある。

(4) 祭祀・儀礼

〔祭り〕元旦に海辺で供え物をして神を祭る。今は人間の霊を慰めたり、祭るようなことはしない。

〔祝い〕家屋を新築した時や船を新築した時、盛大な祝いを行う。

〔葬儀〕死者の生前の功績を歌にする。メロディーは定形。その歌を会葬者に聴かせ、会葬者も交替で歌う。

〔死者の埋葬〕墓地に穴を掘り、板を敷く。その上に屍を寝かせて土をかぶせる。その土の上に一本の木を植え墓標とする。その木は切らない。

墓は神聖な場所として意識されている。供え物は特にないが、豚を殺した時は近親者が豚肉を供える。

(5) 信仰と神話

現在はキリスト教徒が多いが、元はアニミズムで、死霊は家の近くにいと信じられていた。

〔創世神話〕ムラによって異なっている。たとえば、紅頭村では、ターラク山から人が出て来てムラをつくったという神話がある。竹の中から人が出てきてムラを創建したという神話もある(村名不明)。

周氏の語るこの創世神話は、ヤミ族がムラ・レベルの共同体

を形成した頃の古い神話であろうが、その内容が明瞭でない部分もある。『生蕃伝説集』<sup>2)</sup>によると、バプット山の巨岩が或日まっ二つに裂けて中から一人の神人が現われ、それから間もなく大津波がルルサツクの海岸にうち寄せ忽ち大竹が割れてもう一人の神人が現われた。二神は独身の男神であったが、親しく往来し、或日枕を並べて臥していた時、膝頭がふれ、一神の右膝から男の子が生まれ、他の一神の左膝から女の子が生まれた。この男女が人類の遠祖であるというヤミ族の創世神話があるという。だが、この神話もバプット山などの地名はあっても、その伝承地は明確でないが、近刊の『原住民神話・故事全集』(2)によれば、類似の始祖神話が紅頭村や漁人村で語られていたことがわかる。

〔その他の文化・民俗〕

周氏からの聞き取りは、以上でとどめるが、以下に周氏がふれなかったヤミ族の文化や民俗について記しておきたい。

〔装身具〕前述したように、ヤミ族は金・銀・銅などを使って、甲かぶとや胸飾りをつくるが、珠たまに糸を貫いた輪をうなじに巻き、或は首に下げる。これらの装身具について、徐瀛洲氏は次のように記している。

以一個或數個大粒珠連串、或製成老年男女戴項飾。由於他們相信青色玻璃珠與金子同樣有靈力、掛在頸上、可以增加

活人的靈氣、抵抗惡靈的侵犯。(『蘭嶼之美』)

つまり、装身具は一種の呪具で、悪霊を祓い、好運を招く霊力があると信じられていたのである。インドネシアなどと同じように、衣服もまた悪魔をはらうものと考えられていたようである。

#### 〈歌垣・舞踏〉

徐氏によると、母屋落成の祝いには、親戚をはじめ村の各家の者全員が参加して、祖先の霊に祈禱してのち、祝賀の歌を歌い、馳走（晩飯）をふるまうという。この時の歌い方が掛け歌形式で、いわゆる歌垣である。一つの歌詞を数種のメロディで歌うというが、今は日本でも歌垣は奄美諸島の徳之島や大島に残るのみである。徐氏はまた、この落成祝賀の日に女性たちが舞踏（円舞）を行うが、これには娯楽性があると同時に巫術性があると述べている。新築家屋が将来悪運に遭わないようにとの願いをこめて踊るからだという。二人く十数人の女性が輪を成して集落の空地や海辺で踊るこの舞踏は、次第に動作が激しくなり、髪をふり乱して踊りながらトランス状態になって終わる。男女が歌を掛け合いながら踊る徳之島井之川の八月踊り（円舞）の終わり方も全く同じである。ただヤミ族女性のこの円舞は、男性禁視のタブーがあるという。

なお、歌垣は遠来の客が船でやってきた時も行われるという。海辺で村人は最年長者を先頭に一列に並び、客を迎えて迎賓歌を歌い、客もまた一列に並んでこの歌に応えて歌う。かくて訪

家に至り、夕刻まで互いに「祝福歌」を「対唱」したのち、「晩飯」に至るといふ（『蘭嶼之美』）。

#### 〈死霊アニミズムと信仰〉

周氏も前掲でふれているように、ヤミ族もまた死霊を恐れているようであるが、東南アジア一帯の死霊についての研究は、日本でも夙に行われており、例えば人類学者村武精一氏は、ポルネオやフィリッピン、台湾の諸部族に強い死霊信仰のあることを指摘し、それは、これらの部族に共通して死霊に対する強烈な畏れと加護を願う心情が存在するからだと述べている。そして、ヤミ族については次のように記している。

「フィリッピンに近い紅頭嶼のヤミ族では、アニオトよばれる霊的存在が信仰されると同時に、ひじょうに畏れられている。アニオトは主に死霊を示すものと考えられ、死者自体をひどく忌む。したがって死者を家屋内の地下に埋葬するということはない。死者は森のなかの墓地に埋葬され、死霊が森から出てこないように願う儀式をおこなう。」<sup>9)</sup>

ちなみに、文中の家屋内の地下埋葬とは台湾原住民タイヤル族の自然死した死者の葬法だが、先住民九族文化村（南投県魚池郷大林村。二〇〇一年三月二十七日訪）に移築された同族の家屋には、家の最も奥の部屋に、切り石で矩形に囲み、その中に屍を入れ、厚い板の蓋をした墓があった（長さ約一・五間。幅約四尺）。

ところで、皆川隆一氏は、ヤミ族の最も畏れる死霊アニート (anito) について、およそ次のように指摘している。

ヤミ族は、人間が死ぬと、その霊魂が肉体から遊離し、頭の霊魂は東南海上の「赤い死者の島」へ行き、弱い霊魂は「タオ (Tao) の島」、即ち蘭嶼島に戻り、その野山を彷徨すると考えている。このアニートは、地上または地下の死者の世界で、生者と同じ生業を営むが、生活は苦しく、山羊や豚の生き血を吸う。また、生者の霊魂をつれ去ったり、生者に病まいや死をもたらすこともある。特に近親者に恨みをなす。

だが、このアニートも死者の世界で永遠に存在することはできず、五回転生して消滅し、最後は鬼茅の茎の内部にある絨毛になる。

皆川氏はヤミ族の死霊アニズムについて以上のように詳細に分析しているが、村武教授は、このようなアニートの信仰は、東南アジアの諸部族に広く存在し、台湾の原住民ブヌン族やアタヤル族、フリリツピン・ミンダナオ島のバゴボ族、ボルネオのイバン族などに存在すると述べている (前注・13参照)。

同じボルネオの海洋民メラナウ族が、海難にあいその屍を發見できなかった水死者の霊を DAKKAN (死者の舟) に乗せ、遭難した方角に向けて海へ流すのもこのような死霊のわざわいを祓う儀礼であろう。メラナウ族の家には、DAKKAN を常備しているところもある (一九九七年四月訪)。

なお、皆川氏によると、ヤミ族の社会では天界に「タオ・ド・ト (Tao do to)」という神が住み、そのなかでも「シ・アカイ・ド・ト」という神が天界最上層に君臨する神として殊に尊敬を集めているという。「タオ」とは「人」の意。「ド」は場所を表す前置詞。「シ・アカイ・ド・ト」は「長老のタオ・ド・ト」という意味だという。これら二神の關係がはつきりしないが、「*gaga*」は天上神一般を指し、後者は先祖神を指しているのではないかとと思われる。おそらく祖霊信仰が先に在って、その後、超人間的存在としての天上神に対する信仰が生まれたものと思われる。ヤミ族には次のような創世神話も伝えられているという。

〈創世神話〉「シ・アカイ・ド・ト」は、ある時、地上世界を見下ろした。すると緑豊かな美しい島が目に入った。

シ・アカイ・ド・トは、「あんな美しい島に誰も住んでいないのはもったいない」と国褒めし、自分の孫を木と石の姿に変えて地上に投げおろした。

Tao 族 (ヤミ族本来の名称) はその末裔である。<sup>9)</sup>

おそらく、この創世神話は、前掲の周氏の語る神話や『生蕃伝説集』所収の神話より新しく、ヤミ族社会が次第に地縁化し、さらに部族社会としての結束を固めながら拡大発展した頃に形成された神話であろう。

ちなみに、以上に拠っていえば、ヤミ族には海彼と天上に浄土の存在を認める観念があり、彼らはまた自らの住む島の地上

や地下にも他界（異界）の存在を認めていたことがわかる。

### 五 共生社会の実状とヤミ文化の重要性

蘭嶼島の島民ヤミ族が自給自足の生活を営んでいることは既に述べたが、伝統的な文化を残す古い集落を訪ねて気づくことは、集落内の各家屋の規模は、ほとんど同じで（写真12・13）、巨館のないことである。このことは十一世紀以降の沖繩などとは違って、支配者が存在しなかったことを示しているが、事実ヤミ族社会には強大な権力を持つ首長がいなかったという。島民は一般に小柄で、かつての沖繩・奄美諸島の島民と同じように素足で歩く人が多い（写真・14）。運搬用の袋や籠の緒を頭にかけるのも琉球列島や八丈島と同じである。

双方的親族関係を中心にして、横の関係でつながりながら相互に協力して暮しているのがヤミ族であるから、彼らの社会には「支配と絶対服従」という人間関係は、存在しなかったはずである。おそらくヤミ族社会の構成員は、その権利と義務において、すべて平等だったと考えられる。

前記の周氏も語っているように、この島では土地の私有と相続の権利を島民個人に認めた。だが、鄭成功が渡島して統治した十七世紀中葉以降、中国人移民が台湾西部一帯で行った墾戸・佃戸の制（地主・小作人制度）を敷くようなことはしなかった。家族や親族に必要なだけの食糧と若干の貯え分を生産すれば、

こと足りたとする発想があったようである。

この島にはまた、専門の職能者といえは銀甲ぎんかぎを作る職人と靈能者（シヤーマン）ぐらいで、他にはいないという。大工もいないので、家屋や舟の建造をはじめ、生活財はすべて自分で作ったという。

「分業こそ貧富の格差をもたらす、諸悪の根源である」と説いた学者がいる。至言である。分業とは、技術の占有化であり、これをより多く独占した者が、多くの富（財）を獲得し、社会に支配と被支配の関係をもたらすからである。

学習院女子大学の乾尚彦教授は、このように専門職を設けなかったことは、平和を維持するためにヤミ族が考え出したしくみの一つだと述べている。つまり、このことによって個人差が生まれず、階級の出現を防ぐことができるからである。

乾氏はまた、ヤミ族が平等社会を指向している事例として、漁で得た魚や儀礼の折に供えられた肉などを平等に分配することをあげている。<sup>5</sup>利潤のみを追求する余りに、弱者を切り捨てていく（高度に発達した文明社会）に比べれば、このようなヤミ族の努力は高く評価されてよいが、平和で平等な社会を維持するための最も基本的な〈蓄財の放出〉というしくみのあることも加えて指摘しておきたい。

#### 〈蓄財の放出〉

スペインのパタン島植民地化によって渡洋交易をとざしたヤ

ミ族は、十九世紀から二十世紀にかけ周辺諸島から孤立し、島内では各個人の間で「威信競争」が発達した。これは新築または改築した家屋の立派さや大きさ、新造船落成祝賀儀礼（写真・15）の盛大さなどを競い合つて各個人がその威信を誇示し合つた島民間の（競争）で、その伝統は今も継承されている。ただ、威信を誇示しすぎて出しゃばる者に対しては、それを抑制する特別な言語があつて、これを使ってその態度を改めさせたという。

家屋や船の建造者は数年かけて計画・準備し、特にその落成祝いを人生最高の晴れ舞台として挙行する。いずれも新築の家屋や船によりつく悪霊祓いを主目的とした儀式だが、同じ村の住民をはじめ他村からも大勢の客を招いて大盤振舞おごるまいを行う。この時、主催者が準備した大量のタロイモや豚・山羊などの肉も参会者全員に均等に分配される。かくて主催者（建造者）の蓄財はほとんど放出され、その富は島民に還元される。富が特定の個人に独占されないシステムである。ちなみに、小山修三氏によると、アメリカ北西海岸インディアンや南太平洋の社会にも、儀礼を行い、共食して偏つた富を一挙に社会へ還元する経済システムがあつたという（NHKブックス『縄文学への道』）。

台湾本島の諸部族が首狩り族といわれるように、他部族や漢民族・日本人などと死闘を重ねてきたのとは違つて、ヤミ族が人をあやめたことは一切なかった。一世紀にわたり、平和な社会を維持できたのも、如上の社会的なシステムや固有の文化を

大切に守つてきたからに違いない。今学界が関心を寄せているのもヤミ族のこの「風格ある平和な社会」のようである。

〔学界の提起するヤミ文化の重要性〕

乾尚彦教授は、人類学上、台湾はオーストロネシア系諸族の源郷として有力な候補にあがつているが、台湾本島はヨーロッパ人や漢民族の支配を受けているため異文化の流入があり、純粋な源郷とはいえない。だが蘭嶼島は他民族の支配を受けていないからヤミ族の文化には、この源郷としての文化を内包している可能性があり、その研究は極めて重要であると指摘している（前注・15参照）。

この乾教授や国立民族学博物館の佐々木高明教授、帝京平成大学の土田滋教授、前掲の徐氏や皆川氏、三富正隆氏をはじめ多くの専門の学者・研究者が集つて、二〇〇〇年一月「台湾YAMI文化研究フォーラム」がスタートし、現在も調査研究をつづけている。この研究機関は二〇〇三年三月十五・十六日、慶応大学日吉校舎で「公開フォーラム」を行った。本紀要の字数の制限もあり、以下に、このフォーラムで提起された、ヤミ文化の重要な課題を三項ほど記してこの稿を閉じたい。

(1) 劉斌雄氏（元台湾中央研究院民族学研究所長）談

ヤミ族は敵が存在しない環境の中で、父系の大家族や氏族社会を必要としなかった。家族の原型である核家族に回帰し（風格ある社会）を形成するようになった。平和な社会を構

成する道をヤミ族の文化に見い出せるのではないか。

(2) 佐々木高明氏談

南方から海上の道という大きな流れの中に(ヤミ族の文化を)位置づけ、日本人のアイデンティティーにどうつながっているかを考えたい。

(3) 音谷健郎氏(朝日新聞・記者)

台湾の他の先住民は、反目や首狩りの殺し合いがあつたのに、ヤミ族は基本的に共存した。神への強い信頼と、言葉の巧みに操り抜きんでた勢力を出さないように牽制するルールがうかがえる。(社会を平和に保つヒントがある。)(以上、二〇〇三年三月二十八日・朝日新聞所載「台湾・ヤミ族研究の一世紀」参照。)

あとがき

以上を記すにとどめる。今後に多くの課題を残したままであるが、この拙稿が些かなりとも研究者諸氏のお役に立てば幸いである。なお、本稿を成すにあたって貴重な資料を提供していただいた『自然と文化』の編集長真島建吉氏と法政大学法学部講師大浜郁子氏に厚く御礼申し上げたい。

注

① 平成十三年度～平成十五年度 科学研究費補助金基盤研究(B) (2) (研究課題番号13410060) 「琉球列島における社会的、文化的ネットワークの形成と変容に関する総合的研究」 研究代表者・法政大学法学部教授安江孝司。

② 「民俗の伝播と地域的特性の形成」(付) 南島・近隣アジアの人々とくらし(法政大学沖縄文化研究所発行『琉球列島・社会的文化的ネットワークの研究』所載。二〇〇三年三月)。「南島とインドネシアの古葬墓」(「白梅学園短期大学紀要」第三十九号所載。二〇〇三年三月)。「琉球列島・東南アジアの穀倉と風葬墓に関する民俗誌」(法政大学沖縄文化研究所発行『琉球列島における社会的、文化的ネットワークの形成と変容に関する総合的研究』所載。二〇〇四年三月)。同論文、同研究所紀要『沖縄文化研究』三十一号(二〇〇四年八月)および法政大学国際日本学研究所発行『国際日本学』第三号(二〇〇五年十月)に転載。なお、同研究所の国際学会で、アジアの漂海民(沖縄の海人、台湾・中国・香港の蛋民、フィリッピンのパジャウ族、スラウェシ島テンペ湖の筏上家屋民など)について口頭発表したのが、その報告の記録が同、国際日本学研究所発行(二〇〇四年七月)の『研究報告第五集・世界の中の日本Ⅱ』に収録されている。

③ 『蘭嶼之美』 民国八十八年(西曆一九九九年)六月、文建会文字影音出版品展售中心、発行。発行人・行政院文化建

設委員会林澄枝。著者の徐瀛洲氏は南方俗民物質文化資料館に勤務する研究者。

④ 『台湾全図』。台北市の珊如図書出版公司発行（二〇〇一年一月）。前掲の蘭嶼島図も同書による。

⑤ 季刊『民族学研究』第十九卷第二号（一九五五年九月）参照。

⑥ 『自然と文化』七十三号（特集 ポンソ・ノ・タオ 台湾蘭嶼の民族と文化）（二〇〇三年十月、日本ナショナルトラスト発行。真島建吉編集）

⑦ 以上の農耕、渡洋交易については、三富正隆「社会の変化と灌漑・水田耕作」（前注・6所載）を参考にした。

⑧ 拙稿「ボルネオ先住民の削り花と杭上家屋（舟屋・巨館・長屋）」（『文化交流誌 青』第四号。二〇〇一年七月）参照。

⑨ 演題「いわゆる〈黒潮文化〉について」。法政大学沖縄文化研究所第一〇六回公開講演会。二〇〇二年六月二十二日。

⑩ 「私立大学等経常費補助金特別補助（特色ある教育研究）」の交付による調査研究。研究課題「沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究」。代表：法政大学教授山本弘文。

⑪ 法政大学沖縄文化研究所発行『沖縄渡名喜島における言語・文化の総合的研究』所収。一九九一年七月。

⑫ 佐山融吉、大西吉寿著『生蕃伝説集』。大正十二年十一月、杉田重蔵書店（台北市栄町）発行。『原住民神話・故事全集』（1）・（2）|| 林道生編著。漢芸色研文化事業有限公司（台北市）

発行。二〇〇一年。

⑬ 村武精一著『アニミズムの世界』（吉川弘文堂刊。一九九七年六月）。他に台湾原住民関係の民俗研究は古野清人著『高砂族の祭儀生活』（三省堂刊。一九四五年）などがある。

⑭ 以上は、皆川隆一「世界観と信仰」（前注・6所載）による。

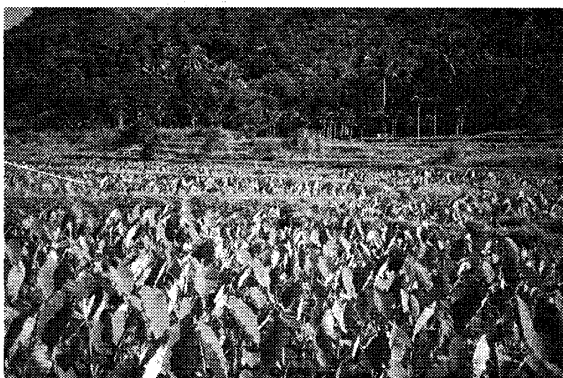
⑮ 乾尚彦「ヤミ族の文化―継承と変容」（前注・6所載）

あずま よしもち（民俗学・文学）

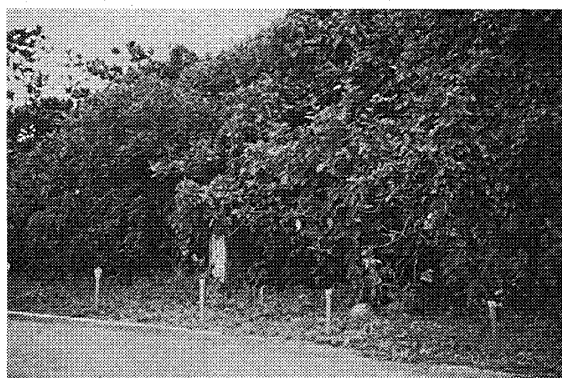
\*1 白梅学園短期大学名誉教授  
Yoshimochi Azuma: On Communal Society of Sea Tribe YAMI in RANSHO Islands, TAIWAN



〔参 考 写 真〕



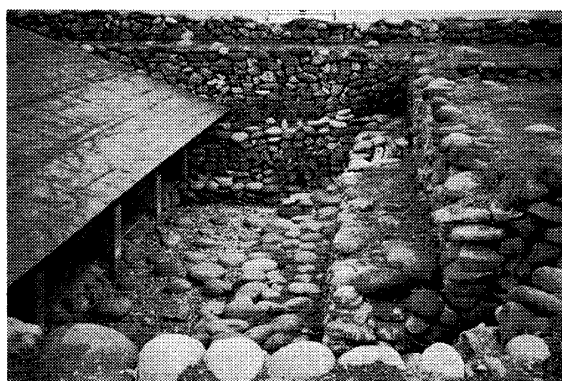
写真・1 タロイモの水田



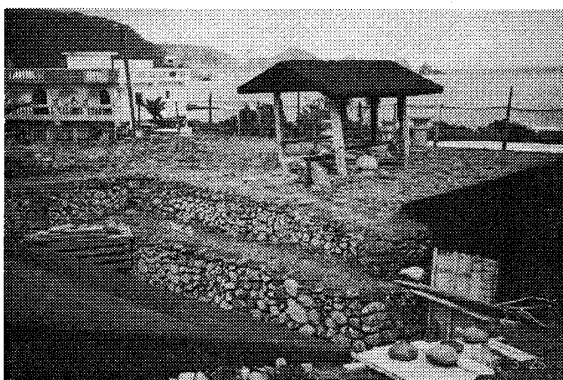
写真・2 第六公墓



写真・3 東清村のカヌー



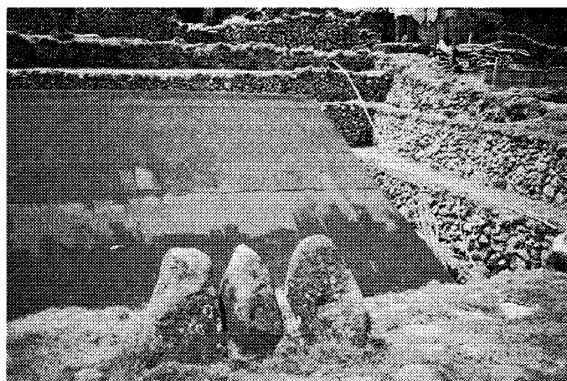
写真・4 東清村の地下式住居



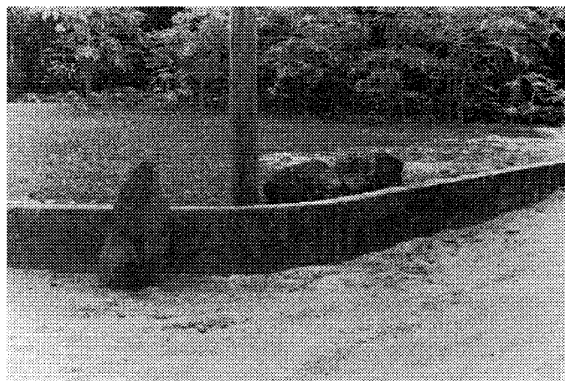
写真・5 野銀村の地下式住居



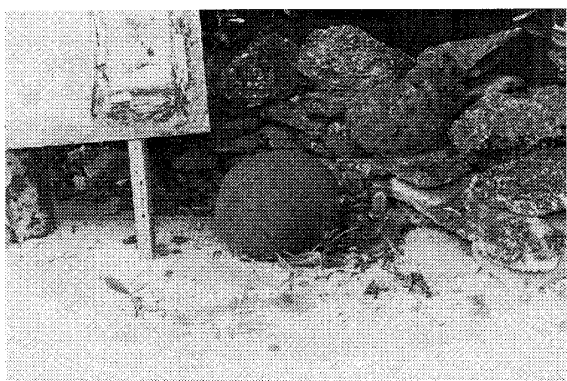
写真・6 地下式住居の涼み台



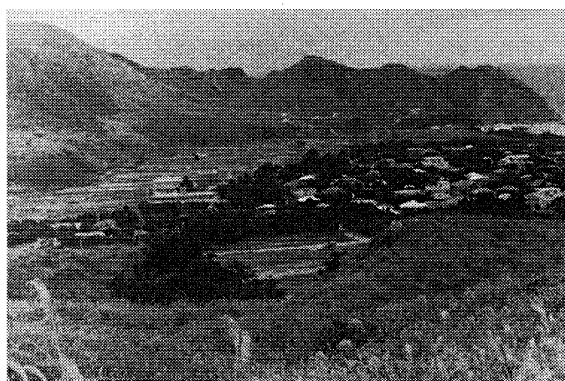
写真・7 霊石・靠背石



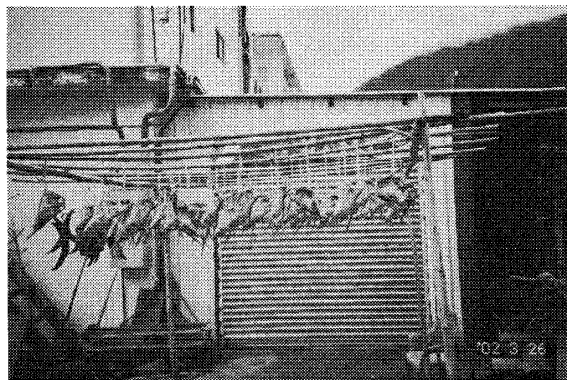
写真・8 沖縄・渡名喜島の霊石



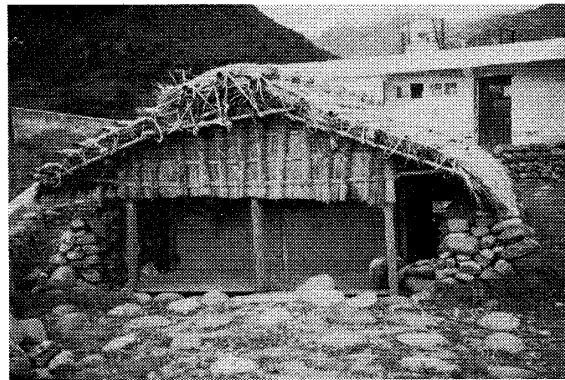
写真・9 渡名喜島のチキシ



写真・10 渡名喜村全景 右端が西岸



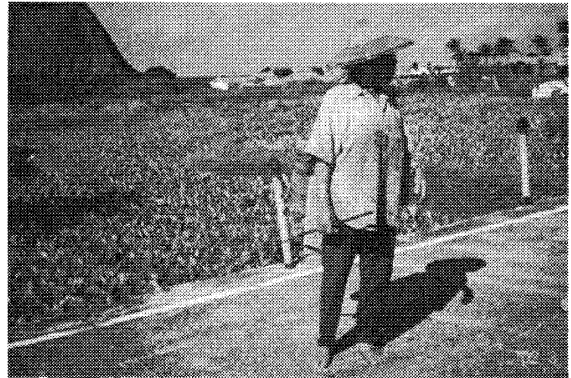
写真・11 トビウオの乾燥場 (野銀村)



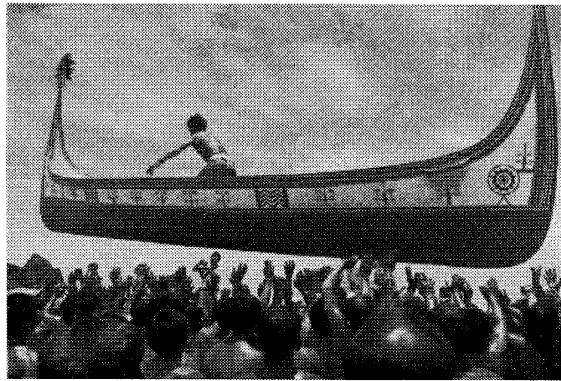
写真・12 東清村の民家 (茅ぶき)



写真・13 野銀村の民家



写真・14 島民・背後はタロイモ水田  
(紅頭村)



写真・15 新造船の落成祝賀儀礼